

2024 年 10 月 29 日
早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター

早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター・1F 廃炉の先研究会
ふたば未来学園中学校・高等学校

第 11 回・1F 地域塾
議事録

開催日時：2024 年 9 月 28 日（土）14:50-18:00

会場：福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校・会場＋オンライン（Zoom）

参加者数：61 名（会場 58 名、オンライン 3 名）

総合司会：小磯匡大（1F 地域塾・副塾頭、ふたば未来学園高等学校・教諭）
鈴木貴人（福島再生塾・運営委員、ふたば未来学園・教諭）

プログラム

14:50-15:00:開会挨拶：1F 視察と 1F 廃炉の先を考える

15:00-15:20:ふたば未来学園の探究活動と 1F 地域塾：林 裕文（ふたば未来学園）
（10 分休憩）

15:30-16:40:少人数グループによる「対話の場」（7 グループ）
（10 分休憩）

16:50-17:40:グループ「対話の場」の報告と全体討論

司会：崎田裕子（1F 地域塾・副塾頭、環境ジャーナリスト）
森口祐一（1F 地域塾・副塾頭、国立環境研究所・理事）
井上 正（1F 地域塾・副塾頭、電力中央研究所・名誉研究アドバイザー）

17:40-17:50：閉会挨拶

1. 開催にあたって 松岡（塾頭）：添付 PPT 資料参照

2. 講演：

林 裕文：ふたば未来学園の探究活動と 1F 地域塾
（報告内容は報告資料を参照ください）

3. 全体会：7グループの対話の報告と議論

グループ 1：1F 視察後の感想を共有し、将来像を考える前に重要な要素について意見交換を行った。「通い続けること」を通じた情報発信の重要性から、対話に必要な要素や、対話以外で人々に考えさせる手法について議論が行われた。30～40 年後の未来において、若い世代が責任感を持ち、過去の出来事を正しく伝えることが重要だ、また、福島風評被害の問題解決にも正確な情報の発信が必要だという意見もあった。共通の意見として「正しい事実を伝える」ことの重要性があげられたが、その実現方法には疑問が残った。対話の必要性が多く出た一方で、対話が逆効果になる可能性への懸念もあり、最適な方法については結論に至らなかった。

未来学園では対話を重視しているが、押し付けではないかと感じることもあり、必ずしも対話が最適な方法とは言えないのではないかと感じる。

グループ 2: 理想とする将来像は、双葉郡を技術が誇れる町にすること。双葉郡には高度な技術が集まっており、それをもっとアピールすべきと思う。例えば、VR 技術で原子炉の内部を 3D 化し、デブリ取り出しの模擬実験に活用するなど、リアルを伝えるツールとして技術が役立つと考えている。

今日の学びとして、燃料デブリの行き先が決まっていないことに不安を感じたが、デブリ取り出しのステップを学ぶことで理解が深まった。こうした情報は、知りたくても機会がない人も多いため、情報共有の場を作る重要性を認識した。

廃炉の多様な将来について、原発復興と共に他の地域資源の魅力も推進すべきとし、再生可能エネルギーの活用が鍵と考えている。具体的には、広野町のバナナの葉を活用したバイオマス発電の計画をもっと推し進めていきたいと思っている。

グループ 3: 未来学園の生徒が、広島市の際に原発について話す予定があるが、何を話すべきか悩んでいる。若い世代として原発問題を語ることが難しく、地元の人々も原発に関わりたくても方法がわからず、福島の実験や教訓が風化する懸念があると感じている。広島には原発の教訓を伝える構造が整っているが、福島にはそのような枠組みがまだ十分に存在せず、個人が主体的に関わる機会も少ない。

「原発の問題を『自分ごと』として捉えるのは難しい」としながらも、探求学習の中で自分と問題のつながりを見つけることが重要だ。具体的には、ロボット技術などを通じて廃炉作業への関わりを通じて地域全体で原発の問題を共有し、問題の風化を防ぎたいと考えている。

グループ 4: グループでは、震災の記憶がある世代とない世代の間で記憶のギャップについて対話が行われ、「震災当時のことを覚えているか」という質問から始まった。自身の経験として、インターネットで原発を調べた際、知識がなかったために福島の第 2 号機が爆発したという誤った情報を信じ込んでしまったことがある。現在でも、SNS 上には「福島は良くない場所」といった偏見が残り、これは親が子供に伝えた価値観がそのまま広がっているのだろうと思う。これらの誤解や偏見が広がる現状は深刻だと感じている。

グループには東京電力の方もいて、燃料デブリ回収が何十年もかかる廃炉に向けた重要なステップであることを理解した。また、未来に向けた取り組みとして、現地で人々の話を直接聞く探求学習の重要性を感じている。私の探求テーマは原発と直接関係はないが、福島の悪い印象を改善する取り組みを行いたいと考えている。

グループ 5: 1F 視察を通じ、廃炉が着実に進んでいる一方で、「数値が安全だから安心していい」との説明が繰り返され、安全・安心が一方的に強調され、疑問や議論の余地が狭められているように感じた。そのため、視察後にワークショップや振り返りの場があれば、参加者が疑問や感じたことを共有し、視察がより濃密な体験になると思う。

廃炉は単に原発事故と向き合うだけでなく、エネルギー問題や生活のあり方の選択を考

える場であるべきと感じている。たとえ原発事故が起きても、原発に頼らざるを得ない社会の中で、自分自身がどのような選択をすべきかを考える場になればと思う。将来的には 1F をミュージアム化し、歴史や記憶を振り返り、考えを深める場所とすることに社会的意義があると思う。

グループ 6: 1F 視察を通じて、廃炉の規模に圧倒され、無力感を覚えたという意見や、震災を知らない高校生が驚いたという声があった。廃炉の後については「更地化」か「震災遺構として保存するか」が議論されたが、結論を急ぐべきではないとの意見が多かった。

福島の人々のみならず、震災を知らない未来の世代も含めて皆で考え続けることが重要だ。広島原発の原爆ドームと比較し、遺構として残すことで風化を防ぎ、実物を通じて世代間で記憶を共有する意義があるが、遺構が負の影響を及ぼす可能性もある。自分事として捉えるきっかけになるとも考えている。そのため、現地での体験機会を増やし、ふたば未来学園など教育機関がその役割を担うことが重要だという意見もあった。

グループ 7: 1F 廃炉の視察から議論が始まり、多様な意見を尊重しながら共通の目標として「安全と安心の確保」が重要だという結論に達した。

住民にとって関心が高いのは、廃炉プロセスにおける安全確保と安心できる環境づくりである。技術的安全に加え、情報提供による安心感の伝達が必要であり、特に処理水放出後のモニタリングや放射線に関する定期的な情報提供が必要だ。具体的には、処理水で育てた魚介類による安全性を視覚的に示すことが効果的と思われる。

しかし、放射線値情報の発信は不安を煽る可能性もあり、慎重に進める必要がある。廃炉に向けた未来の中で、安全性確保と安心感を伝えるため、住民との対話と分かりやすい情報発信が重要な役割を果たす。

崎田: まず、次世代、特に高校生を含む若い世代が多く参加していたことが印象的である。大学生の方々はニュースで事故のことを知っているかもしれないが、高校一年生の方々はほとんどよくわからない。若者の間でも事故の正確な情報を次の世代へ伝える重要性が認識され、ネガティブな情報だけでなく地域の良さも一緒に伝えるべきだという話が出たのが、とても心に残った。

また、風化防止への危機感が共有され、震災の記憶をしっかりと残す必要性が多くのグループから指摘された。特に 6 番目のグループから、風化を防ぐために皆を巻き込んで議論することの大切さが強調され、その点についてもう少し詳しく説明いただくとうれしい。

司会: グループ 7 も「みんなを巻き込む」について話をしていたが、具体的に誰を巻き込んでいくべきか、他にどんな人を巻き込んだらいいか、何か意見があるか。

グループ 7: 震災や原発事故への関心は、現地の住民や 1F 地域塾に属する限られた人々にとどまっている現状があると思う。これを日本全体に広める手段として、例えば、広島市の原爆ドームのような象徴的な遺構を残すことが風化を防ぐ手段になるのではないかと思う。

司会：いきなり日本全体を巻き込むのは難しく、大事なのは、より多くの人たちとどう一緒に考えていくのかということだと思う。

井上：廃炉と復興の同時進行において、若い世代が復興のビジョンを作って「ドリームプラン」を策定し、発信することが重要だ。ふたば未来学園の生徒がこうしたビジョンを通じて多くの人に影響を与えられることを期待している。

グループ 5 の話について言えば、「安全だから安心」との説明が必ずしも安心感に繋がらないということがあり、議論をする上でのギャップになる。例えば、1 ミリシーベルトだから安全だと言われても、それを安心して受け入れる人もいれば、放射線への不安を感じる人もいる。このギャップを埋めるためにも、こういう場で議論をしてもらえと思う。

グループ 5：私も同じように感じている。どっちが正しいかを議論するのではなく、率直に「私はそうは思えない」と言える雰囲気があれば良かったと思う。視察中に「大丈夫です」と言われたが、本当に大丈夫か疑問が残った。もっと自由に議論できる場があれば、意見交換が進み、より多角的な理解が得られたと考える。

井上：専門家と一般の方とのギャップは大きな課題であり、その解消には対話の機会を増やすことが重要だ。専門家の知識と一般の方々の疑問や不安を結びつける場が必要であり、対話を通じて双方の理解を深めることで、より良いコミュニケーションが生まれる。

司会：安全と安心の違いについての議論は、これまで何度も行われてきた。今日の説明では「安全だから安心してください」というトーンが感じられ、一方的なコミュニケーションと受け取られる可能性があった。この点について、説明の仕方を見直す必要がある。安全と安心のコミュニケーションは、13 年間議論されてきた重要なテーマであり、今なお感じられるギャップを率直に指摘できる場を持つことが大切だと思う。

井上：グループ 6 の方が初めて 1F の廃炉の現場を訪れて驚いたという話があった。私は長い間この問題をみてきたため、専門家として 1F の現実を理解しているが、その「驚き」は大きなインパクトがある。今後、さまざまな方に現場を知ってもらう機会が重要だと感じる。その驚きについて、もう少し詳しく説明してもらいたい。

グループ 6：映画では見ていたが、実際に 1F 現地を訪れてみると、現実感が薄れ、まるで別世界のように感じたというのは興味深い感想である。映像と実際に見るものとの間には大きな違いがあることを改めて実感した。

崎田：廃炉の現場を実際に見たことでショックを受けた人もいれば、落ち着いて受け止めた人もいた。自分の目で見ることで、言葉では伝わらない強さを感じたことは重要である。

グループ 3：期待していたほど心が動かなかったという点が大きなポイントである。原発の教訓を継承する上で、感情的なインパクトを伝えることは重要だが、それが全ての人に同じように伝わるわけではない。この視点は今後も考慮すべき重要な点だと感じる。

正岡：安全と安心は人それぞれの受け止め方が異なることは当然であり、どちらが正し

いわけではない。技術的な安全は科学的データを基に判断しており、日本や国際機関で認められている基準を使用している。

安心については、皆の感じ方が異なる。例えば、ALPS処理水に対する「少しでも体に入れたくない」という考え方は一理ある。安心には実績と信頼が重要であり、トラブルなく運営し、問題があれば正直に報告することで信頼を積み重ねる。最終的には、人と人との信頼関係が大切であり、対話を通じてお互いの信頼を深めていく必要がある。

佐々木：今回の 1F 地域塾で一番印象に残ったのは情報発信である。若い世代が将来この問題を抱える点に共感し、若い人材を育成して関与する人を増やす重要性を理解している。しかし、正しい知識がない、または偏見を持つ大人にも伝える努力が必要であると思う。それにより、より良い形で前進できるのではないかと感じる。

個人的には、来年、福島復興や原発について国内外に発信するためにフランスに留学予定であり、今回の対話を通じてその決意をさらに強めることができた。

林：皆さんの意見に共感できることが多くあった。特に若い世代の活躍の重要性は感じるが、過度に強調すると彼らにプレッシャーを与える可能性がある。大人としては、自分たちが全力で取り組み、それでも解決できない課題を若い世代に託すべきだと思う。探求の文脈では、地域で大人と接するだけでなく、真剣に取り組む大人や本物の何かに触れる経験が重要だと思う。現役世代としての努力が必要でありつつも、生徒たちの次世代のために頑張りたいという声を聞いたことは嬉しく、ふたば未来学園の探求が 10 年間で大きく前進していることを実感している。

以上